

## 2023 年度なにわ大阪研究センター事業紹介

関西大学なにわ大阪研究センターでは、センターがめざす「ネットワークとしての大阪研究の拠点づくり」を支援するために本センターの活動方針の中核ともいえるべき研究領域・テーマを設定しています。これらを足掛かりとして、本センターにおける地域研究と連携の活動が一層重層化されるとともに、今後の継続的な外部資金獲得の基盤が形成されることが期待されています。

### 2023年度【基幹研究班】

研究領域・テーマ	<ul style="list-style-type: none"> <li>道頓堀五座、芝居小屋大工中村儀右衛門資料調査研究、上方演芸ならびにCGによる可視化の促進と発信</li> <li>鉄砲鍛冶屋敷井上関右衛門家に関する堺市との共同調査に基づく鉄砲ならびに「モノ作り」に関する研究</li> <li>豊臣期大坂図屏風に関連する海外研究機関との共同研究成果の継承</li> </ul>
研究課題	なにわ大阪研究センターにおける研究成果の可視化
研究代表者	乾 善彦 文学部・教授 なにわ大阪研究センター・センター長
研究概要	<p>2021年から改正されたなにわ大阪研究センター規程によって、同センター長を研究代表者とする基幹研究班を設置し、基幹研究のテーマのうち、2022年度に引き続き、①道頓堀五座、芝居小屋大工中村儀右衛門資料調査研究、上方演芸ならびにCGによる可視化の促進と発信、②鉄砲鍛冶屋敷井上関右衛門家に関する堺市との共同調査に基づく鉄砲ならびに「モノ作り」に関する研究、④豊臣期大坂図屏風に関連する海外研究機関との共同研究成果の継承の三つのテーマに取り組むものである。</p> <p>①については、2022年度、道頓堀CGの通行人入りバージョンを完成させたが、2023年度は、英語版の完成とブラッシュアップをおこなう。</p> <p>②については、2022年度、鉄砲製造過程のCGを作成したが、2023年度はそのバージョンアップを期し、鉄砲の製造過程の解明に向けて、鉄砲に用いられた和鉄の鍛造加工性とたたら製鉄原料由来の化学成分に注目した調査を行う。また鉄砲鍛冶屋敷のCG等の作成を推進し、2023年度の「(仮称)堺鉄砲鍛冶屋敷ミュージアム」開館に向けたコンテンツの完成を目指す。</p> <p>④については、2022年度に復旧をおこなった豊臣期大坂図屏風のデジタルコンテンツの公開とバージョンアップに加え、新たにエッゲンベルク城博物館の日本の間のVRの作成に着手し、あらたな段階として博物館展示用コンテンツとWebによる情報発信の準備を行い、2025年度の完成を目指す。</p>
	 
研究分担者	林 武文 総合情報学部・教授 なにわ大阪研究センター・副センター長 藪田 貫 関西大学名誉教授 井浦 崇 総合情報学部・教授 橋寺 知子 環境都市工学部・准教授 丸山 徹 化学生命工学部・教授 北川 博子 関西大学非常勤講師
研究期間	2023年度（1年間）

2023年度～2024年度 【公募研究班】

研究領域・ テーマ	<ul style="list-style-type: none"> <li>世界遺産登録を視野に入れた明日香村との共同研究 (発掘50周年を迎える高松塚関連の研究をはじめ飛鳥の歴史的文化遺産に関連する研究)</li> </ul>
研究課題	甘樫丘遺跡群の変遷と土地利用に関する研究 —発掘調査の成果を中心に—
研究代表者	井上 主税 文学部・教授
研究概要	<p>本研究の目的は、甘樫丘遺跡群を対象とし、発掘調査を通じて得られた資料や、『日本書紀』などの文献史料にみられる記録などをもとに、本遺跡の性格や歴史的な意義について考察することにある。飛鳥時代の邸宅の様子を知りうる資料は少ないため、この遺跡の解明はその手がかりとなり得るものと期待される。また、甘樫丘の南東に位置する島庄（石舞台古墳周辺）には蘇我馬子の邸宅があったと推定され、島庄遺跡がその有力候補とみられている。この島庄遺跡の発掘調査成果とも比較検討を行なう。これにより、甘樫丘遺跡群の性格をより明確にすることができるものと考ええる。</p> <p>①研究打合せ（2023年6月頃、2024年6月頃） 準備作業を経て、6月頃に研究打合せを明日香村役場で開催する。代表者と分担者で研究方法の確認と、発掘調査予定について協議し共有化を図る。2年目も同様に打合せを行う。</p> <p>②発掘調査への参加（2023年10月～2024年2月頃、2024年10月～2025年2月頃） 本学考古学研究室に所属する学部生、大学院生が新協定に基づき、発掘調査に参加する。</p> <p>③遺跡の視察 遺跡の発掘調査にあわせて、代表者と分担者で現地を複数回視察する。検出した遺構や出土遺物についての意見交換を行い、遺跡の時期や性格について検討する。</p> <p>④関連資料調査 代表者と分担者が島庄遺跡から出土した資料の実見を行い、甘樫丘遺跡群との比較研究を進める。</p> <p>⑤研究成果のまとめ（2024年3月頃、2025年2月頃） 1年目の研究成果の取りまとめと、次年度の実施計画案の検討を2024年3月頃に行う。2025年2月に、2か年の研究成果の取りまとめを行う。</p>
研究分担者	西本 昌弘 文学部・教授 長谷川 透 明日香村教育委員会・係長
研究期間	2023年度～2024年度（2年間）

2022年度～2023年度【公募研究班】

研究領域・ テーマ	<ul style="list-style-type: none"> <li>大学昇格を果たした1922年以降、大大阪時代の各分野で活躍した本学所縁の人材の発掘と大学の足跡を探る研究</li> </ul>
研究課題	「大大阪」の時代と関西大学 ー山岡家文書の調査・研究を中心にー
研究代表者	官田 光史 文学部・准教授
研究概要	<p>本研究の目的は、山岡家文書（山岡順太郎・倭の旧蔵資料）の調査・研究によって、関西大学関係者の活動という視点から、「大大阪」時代の政治や社会のあり方に光を当てることである。とくに山岡が本学の総理事や学長などとして本学の経営・教育に携わった1920年代の資料を重点的に調査・研究することで、山岡をはじめとする本学関係者が「大大阪」の形成と発展に貢献した姿を描き出すことを目的とする。</p> <p>また、本研究の特色は、山岡家文書という質・量ともに充実した資料を初めて本格的に研究することであり、そのポイントは①山岡家文書の調査・研究、②「大大阪」を支えた大阪市役所・大阪市会の校友の調査・研究、③「大大阪」のツーリズム研究の3点である。</p> <p>これらの研究の集大成として、最終年度には講演会を開催するとともに、山岡家文書に係る講演資料を作成する。講演会については、1920年代の東京など、他の都市と大阪の比較も視野に入れて企画する。山岡家文書の目録は、新出資料の基礎データとして、大阪・関西の地域史研究はもちろん、日本近現代史研究に大きなインパクトを与えると期待している。</p> <p>(2022年度)</p> <p>①仮目録の作成とともに重要資料の翻刻を進め、山岡を中心とする政官財界のネットワークの広がりを解明する。</p> <p>②山岡家文書、さらには大阪市史編纂所所蔵の地域資料、大阪市公文書館所蔵の公文書のなかから大阪市役所・大阪市会の校友に関する資料を収集する。それらの資料と『大大阪』などの雑誌・新聞の記事を合わせて検討を加える。</p> <p>③山岡倭の旧蔵資料のなかの観光パンフレットを分析する。</p> <p>(2023年度)</p> <p>研究成果に基づいて講演会を開催するとともに、山岡家文書に係る講演資料を作成する。</p>
研究分担者	米田 文孝 文学部・教授 伊藤 信明 博物館・学芸員
研究期間	2022年度～2023年度（2年間）

2022年度～2023年度【公募研究班】

研究領域・ テーマ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・その他、なにわ大阪に関する諸問題に関する研究（大阪の都市景観の変遷）</li> </ul>
研究課題	<p>大阪の失われた景観・残る景観 —戦後昭和・平成の大阪を捉えた風景写真集・絵画を用いて</p>
研究代表者	岡 絵理子 環境都市工学部・教授
研究概要	<p>本研究では、戦後復興、またはその後の「都市再生」が行われる直前の1990年ごろまでの写真や絵画を用いて、都市の更新により失われた様々な大阪の景観を見出すことを目的としている。具体的には、主に戦後に撮られた写真と、同じ場所・同じ視点場で写真を撮影し、その両者を比較し、その場所の何が失われ、何が残されたのかを検証する。さらにそこに起こった都市計画的出来事を調査し、記載する。これらから、戦後昭和から平成にかけての大阪の景観の変遷と、その背景にあった文化・都市行政などの社会的状況の変化との関連性を浮かび上がらせることができると考える。</p> <p>大阪の景観構造を歴史的視点から考察した研究は、「浪花百景」や「摂津名所図会」などを用いた近世を対象とした景観研究が複数ある。また、近世、近代においては、中之島、御堂筋、橋梁、大阪駅など、大阪の景観を代表する「部分」の景観研究が多くを占めている。</p> <p>しかしながら、近年「都市再生」が盛んに行われるようになり大阪の町の再開発・更新が進んでおり、大阪の景観構造にも大きな変化が見られることは周知であるが、これらを扱っている研究はほとんどなされていない。大阪の景観変遷の特徴とも言える「移ろいやすさ」の要因について、都市景観・都市計画と建築史の視点から解明しようとする点を、本研究の特色の第一とし、明日の都市景観・都市計画のありようを担うであろう、次世代の育成を、第二の特色としたい。</p> <p>(2022年度・2023年度)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 対象とする写真・絵画の選定</li> <li>2. デジタルデータの作成</li> <li>3. 写真・絵画の視点場（地点）確定</li> <li>4. 写真・絵画の同じ視点場での写真撮影</li> <li>5. 写真の現在の写真、絵画と現在の写真の比較と変化・変容の確認</li> </ol> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
研究分担者	<p>橋寺 知子 環境都市工学部・准教授 宮地 茉莉 環境都市工学部・助教</p>
研究期間	2022年度～2023年度（2年間）